

氏名(本籍)	金 ^{きん} 城 ^{じょう} やす子 ^こ (静岡県)		
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)		
学位記番号	博甲第4737号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	小児がん患児と家族に対する病院内での支援のあり方に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士(ヒューマン・ケア科学)	松田ひとみ
副査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副査	筑波大学講師	博士(保健学)	柏木聖代
副査	筑波大学准教授	博士(看護学)	古谷佳由理

論文の内容の要旨

(目的)

小児がん患児と家族のもつニーズに対応した医療と看護支援のあり方を明らかにするために、療養環境や支援の内容、児と家族による医療者への期待を構造的に把握する。さらに、入院児の発達支援に必要な医療保育士の役割を分析し、医療における保育士と他職種との連携可能性を探ることを目的とした。

(対象と方法)

1) 小児の療養環境における課題の明確化

入院児の療養環境として、小児の病床数や看護者の配置状況、遊び、教育環境の整備状況を把握するために看護師長、看護師を対象として質問紙調査を実施した。さらに、入院児の家族のもつ医療や看護に対するニーズを明らかにし、小児の療養環境に関する課題を明確にするために質問紙調査を実施した。

2) 入院児に対する生活支援、発達支援の実態把握

看護師の入院児に対する支援の実施状況について質問紙調査を実施した。また、看護師による入院児の遊びに関する認識を調査した。

(結果)

1) 小児の療養環境における課題の明確化

小児の入院する病棟は、成人患者との混合病棟が69% (363病棟のうち252病棟) と増加し、混合病棟では看護師の配置が少なく、必要な設備が整備されていなかった。また、看護師長は、看護師の配置が少ないために十分な支援ができず、看護師の資質の問題として対象理解が不十分であり、忙しさのために入院児の遊びや教育にまで目が向けられていないと認識していた。

2) 入院児に対する生活支援、発達支援の実態把握

入院児に対する支援として、看護師は、遊びや学習支援など、時間を要する支援への関わりが少なかった。看護師が行う入院児の支援には、病棟の種類、付き添いの状況、医療保育士の配置の有無が影響していた。家族が看護師により支援を受けた項目は、日常生活内容であった。しかし、このような支援について、家族は看護師から十分な支援を受けているという認識が少なかった。看護師は遊びが病気の回復を早めると認識

していた。しかし、業務が気になり遊びに集中できないことや子どものニーズに応じた遊びができないことを問題としていた。看護師による発達支援が十分できない状況において、医療保育士の配置が求められていた。

(考察)

本研究より、小児看護に対して入院児や家族のもつニーズは、病気に関するわかりやすく納得できる説明であり、治癒への期待であることが明らかとなった。さらに、入院生活の場として療養環境の改善を求める者が多く、より人間的な生活の場にするためのニーズが導き出された。人間的ということは、児童にとっては「子どもらしく」ということである。すなわち、友だちと遊ぶことや一緒に勉強できることであり、これが主であるとすれば、従として治療生活が位置づけられる。これらが安心した生活の維持につながるが、このような児童に対する療養環境を整備するのは医師や看護師であり、入院児や家族に対する支援方法の習得と医師や看護師に対する接遇の改善が求められることがわかった。

また、入院児の生活や発達を保障するための遊び時間と場の確保、ならびに遊びを支援する役割を担うものの必要性が明らかとなった。このような子どもの健全な成長発達を支援するために、特に医療の場においては、医療保育士を配置する必要性が示唆された。

今後は、長期療養を要する小児がんに関する社会の認識を深めるために、本研究の成果を公表すると共に、入院児の発達を支援するためには医療保育士の配置をすすめるための方策を具体的に示すことが課題となった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

長期間入院加療が必要である小児がん患児を対象として、「子どもらしい生活」環境を整備する必要性と医療保育士の導入の意義を実態調査により解明することを目的とした研究であった。特に入院を余儀なくされている児童の成長発達には、「遊び」の導入が不可欠であることと、療養上の世話業務を役割とする看護師が多忙さゆえに「遊び」を支援できない実情を明らかにした。そこで医療保育士の必要性が導き出されたが、この点で独創性のある研究となった。看護管理者や看護師、小児がん患児の家族などを対象に広域的に調査を行っているが、各調査の関連性を導き出すことが今後の課題である。また、実情に即した研究調査であったことから、今後は、医療保育士の導入など、調査結果に基づき説明力のある提言を行う準備することが課題となった。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。